閉会に当たって

研究情報部長　松村　雄二

二日間にわたり、皆様お疲れさまでございました。最後に当たり、本研究集会を主催する立場を代表して、ご挨拶申し上げます。

主催した側から言うのもなんですが、今回の研究集会は、各研究発表の内容がそれぞれ高い水準に達していたことといい、聴衆の皆様の活発な質疑応答といい、双方補完し合ってきわめて充実した内容の集会であったと存じます。二年ほど前から「境界と日本文学」という総合テーマにしたがって年々の特殊テーマを定め、招待発表や講演をお願いする先生と一般応募の発表者と組み合わせて行うようになったのですが、本年の「翻訳とその周辺」というテーマは非常に絶好のテーマであって、それが今回のような充実した成果をもたらした最大の要因であったかと思います。

翻訳という事柄は、海外で日本文学を研究している皆様にとっては常に切実な関心の的であらざるをえない問題であろうと思います。私たち日本の研究者の方が、みずから翻訳という作業に従事することがないだけに、海外の皆様からいろいろと教えられるばかりで、その点深く反省しなければならないと思った次第です。

この二日間、直接に苦労されている皆様によって、翻訳を巡るさまざまな具体的問題について改めて目を見開かさせていただきました。

熊慧蘇さんからは、通俗軍談を巡って、中国と日本の二国間にわたる翻訳ならぬ翻案という相互の文学的変容の問題、招待発表のソーニャ・アンツェン先生からは、英語に訳す際に採用する文体によって翻訳の質が変わらざるを得ないという問題、また鄭炳浩氏には、翻訳とは何かという翻訳思想の形成の問題、

李応寿氏からは、舞台劇『新国王』の成立をめぐっての演劇と翻訳との関わりの問題、長島要一氏からは、鴎外の例を引き合いに、いわば翻訳における異訳が避けられぬ現実であることの問題、張栄順さんからは、小説と映画という二芸術間にわたる交渉を文化の翻訳という観点によって解読する新しい方法の問題、李郁蕙さんからは、翻訳の一側面として、日本によって母国語による表現を奪われた台湾の作家たちがいかに日本語と母国語の間で苦闘せざるをえなかったかという言語的葛藤の問題、招待発表のカンラヤニー・シタスワン先生からは、日本の近代小説が外国に翻訳紹介される際の各国独自の歴史的事情という問題等々、実に多様な問題がなまなましくも提起されました。また一般研究発表であったアンドレア・ラオス氏も、翻訳にまつわるドイツ人翻訳学者アペル氏の言説を紹介し、外国人による日本文学研究の問題点を指摘されました。

公開講演をお願いした潟沼誠二先生は、幸田露伴が明治初期にいかに外国の学術雑誌類から文学概念の影響を受けていたか、日本人がいかに外国思想の翻訳によって近代小説をうち立てていったかといった点につき、露伴の文学的形成に即しながらお話し下さいました。スティーブン・カーター先生は、頓阿の和歌を翻訳したご自身の経験に即しながら、いかに和歌の持つ詩的特性を別な言語に移したらよいかについて論ぜられ、翻訳の持つ限界と可能性について具体的にお話しいただきました。

このように整理してみますと、現今の翻訳を巡る問題が、誤訳とか意訳といったレベルで云々されてきた従来の翻訳論の領域をはるかに超えていて、いかに個々の研究テーマと密接に関わって深く内的に結びついているか、それぞれどのように固有の難題を各研究者に課しているかが分かってきます。

皆さんがお国にあって、いかに日常的にこの問題に直面し、われわれ日本の研究者がそれと気づかないところで苦労なさっているか、皆さんの日頃のご苦心に改めて敬意を捧げいたいと思いますし、日本文学を翻訳することの難しさということをつくづくと考えさせられたこの二日間でありました。

さて、翻訳という問題を改めて考えてみますと、長島要一さんが翻訳は誤訳

でしかありえないというふうに述べておいででしたが、文化や感受性を異にする二国間で、はたして翻訳という行為は最終的な実りをもたらすのであろうかという問は、やはりいつでも切実にあるのだと思います。これは、翻訳は有効なのか無効なのかとい問題に置きかえてもいいでしょう。かつて日本のノーベル文学賞作家である大江健三郎氏が、文学は有効か無効かというサルトル的命題について考え、当面文学の有効性という幻を追ってそれに賭けるほかないという、いかにも大江さんらしい真摯な保留を提起されたことがありました。これをもじって言えば、翻訳とは、異なる文化間の橋渡しという有効性の幻を追いかけてする地道で目立たぬ努力の営為にほかならないということになりましょうか。

最後になりますが、この二日間、私たちに翻訳を巡って様々な問題を教えて下さった発表者や講演者の皆様、それに真摯に対応して質疑を展開して下さったご参加の皆様に深く御礼を申し上げたいと思います。聴衆である我々は、ここに提起された諸問題をそれぞれにおいて持ち帰り、各自に与えられた課題として考え続けていく必要があるのではないかと思います。

来年はどのようなテーマでまたお目にかかるのでしょうか。大いに楽しみにしながら、これでお開きにしたいと思います。ありがとうございました。

(この原稿は、当日の内容を、主に発表者個々の論旨の紹介部分を大幅に加筆して作成したことをお断りします。)